

「遠い星まで行かなくても、僕たちの住むここが宇宙」

第1話

「宇宙連詩」をひと言で説明できないことが、未だにもどかしいのです。

そもそも「連詩」という単語すら聞いたこともないという人は多いはず。そんな方たちにとって「連詩」のあたりに「宇宙」という二文字が付いてしまったら、この企画への参加はおろか、理解することさえ投げ出されてしまいそう。

しかもこの「宇宙連詩」というプロジェクトは、時とところによって見た目が千変万化するものですから、誰でも気軽に飛び込みたいと思うのが難しいかもしれません。こんなに楽しい、こんなに心ふるえる企画なのに。

さて。そんな世の中の抵抗感を少しでも軽くして、一人でも多くの皆さんに参加してもらおうと草の根的に展開するのが、子どもたちを主役にして展開する、この「学校学級宇宙連詩」プロジェクトというもの。

「宇宙」と言われて構えなくても、私たちが日常を暮らすこの地球の上がすでにもう宇宙の一部です。「連詩」と言われて戸惑わなくても、友だち同士で数行の詩をリレーしていく言葉のゲームと思ってもらっていいんです。

つまり、それぞれで作った短い詩を次々につなげて、ひとつの大きな詩作品を残そうよ、という、一生ものの楽しい詩の試み、それ以上でもそれ以下でもないのです。

詩を書くことはちょっと特別で、そうでなければとても個人的なものと思われがちだから、照れちゃうな、というひとがいるでしょう。

でもその特別な「非日常」という時間の中に、実は私たちが生きていく上で大切なことがたくさん詰まっています。見たこともない世界が息をはずめて待っています。

私は、このわくわくする計画のナビゲーター役として、子どもたちを(時には大人たちも巻き込んで)、参加したみなさんの内側に、実際の宇宙よりももっと広大な宇宙があることを証明していこうと思います。

参加者の皆さんが他にもない自分自身にびっくりしたり、感動したりする「学校学級宇宙連詩」の風景を、このコーナーでは次々にご報告していきます。

覚和歌子

第2話

2008年5月22日(木)に、白井市文化センタープラネタリウム(千葉県)で、地域の学校の先生方10名を対象にした宇宙連詩レクチャを行いました。先生方からのご要望で、第1詩は、地域ゆかりの山崎直子宇宙飛行士の詩(第1期宇宙連詩の第1詩)となりました。第2詩を、覚和歌子さんが作詩されました。この冒頭2詩を出発点に、先生方が第3詩を自作され、レクチャに参加しました。レクチャでは、JAXA職員が、「宇宙連詩」の「宇宙」の意味を紹介した後、覚和歌子さんに、「詩」とは?「連詩」とは?をテーマに、語って頂きました。そのあと、覚和歌子さんと先生方とで、先生方が自作された第3詩について、ディスカッションを行って頂きました。

私は生まれは山梨なのですが暮らしたのは小学校までの12年間で、そこから先の中学は山崎宇宙飛行士と同窓の松戸第一中学校に通っていました。

そんな縁からも千葉県はまたひとしおの思い出があったので、先生方の作品ひとつひとつをかなり突っ込んで評させていただきました。特に「前の詩から次の詩にどのようにつなげるか」という連詩における一番の妙味について詳しく話しました。

「忙しい合間に5分で急いで作った詩をそう手厳しく批評されても困ります」というような戸惑いの感想を述べられた方もいました。お集まりになられた先生方の宇宙連詩へのスタンスは個々さまざまだったということがわかる感想であったと思います。

本来、詩は指導すべき文芸ではないと思いますが、「宇宙連詩を指導する先生を指導する」という、現場の子どもたちに間接的に関わらざるを得ない機会に直面しながら、私自身もはがゆい印象を持っていたのは事実でした。

どこの学校も概ねそうなのですが、先生方が連詩に参加される場合、作品が教師としての立場や世界観をなかなか離れることはありません。そんな先生方がただひとり人間として心を素裸にしてどんな言葉が生まれるかを見つめたとき、作品はいっそう大きなエネルギーを持つことになるでしょう。そしてそれは、もしかすると今後の学校学級宇宙連詩を進化へ導くきっかけになるかもしれません。

覚和歌子

第3話

2008年11月5日(水)に、町田市立境中学校(東京都)で、1学年7学級243名を対象に、宇宙連詩レクチャを行いました。学校学級宇宙連詩のために、谷川俊太郎さんと、覚和歌子さんが作詩された冒頭2詩を出発点に、第3詩を、生徒が作詩し、レクチャに参加しました。レクチャでは、JAXA職員が、「宇宙連詩」の「宇宙」の意味を紹介した後、覚和歌子さんに、詩とは？連詩とは？をテーマに、語っていただきました。そのあと、覚和歌子さんと生徒で、突撃インタビュー形式で、生徒が自作した詩について、対話を行っていただきました。

午後の視聴覚室に体育座りをした中一243名。

自作詩をクラスメイトの前で発表したり意見交換するなどということはほとんど不可能だった反抗期の自分を思い返せば、この時間を盛り上がらせることがどれだけ手強いかわっているつもりです。

もしも生徒たちを湧かせることができなくても、私の詩の朗読を彼らにとつての「人生初の経験」にしてもらえるならそれでいいことにしよう、と自分が凹まないための予防線を張りつつ心して挑みました。

こういう場合によくあることですが、結果から言うと案ずる必要は皆無でした。

東京都でありながら都心を隔てた静かで素朴な環境は子どもたちの心にも反映しているようで、素直で柔らかなムードにレクチャーが進めやすかったことは驚きでした。

決して自発的に発表などはしなかったものの、詩を書くことを仕事にしている大人というものを目の当たりにして、たった今知らない世界を見ているんだというような、生徒さんたちの生き生きとした表情が印象に残っています。

思春期という繊細で難しい時期を乗り切っていくのに、宇宙連詩に出会ったことが少しでも役に立てばいいのですが、思春期とはそう甘いものでもないですね。

終了後、校門に向かうために通った校庭で、野球部のユニフォームに着替えた男子生徒が帽子を取って「ありがとうございました。さようなら」と挨拶してくれたことがひそかにうれしい記憶です。

覚和歌子

第4話

2008年11月11日(水)に、杉並区立松庵小学校(東京都)で、4学年2学級、約80名を対象に、宇宙連詩レクチャを行いました。学校学級宇宙連詩のために、谷川俊太郎さんと、覚和歌子さんが作詩いただいた冒頭2詩を出発点に、第3詩を、児童が作詩し、レクチャに参加しました。レクチャでは、JAXA職員が、「宇宙連詩」の「宇宙」の意味を紹介した後、覚和歌子さんに、詩とは？連詩とは？をテーマに、語っていただきました。そのあと、覚和歌子さんと生徒で、突撃インタビュー形式で、生徒が自作した詩について、対話を行っていただきました。なお、松庵地区では、地域住民の方々(子育て支援ネットワーク)が、回覧板(「星の回覧板」)を回す形式で宇宙連詩作りに挑戦されました。1000名を超える方々が、参加されました。谷川俊太郎さん、覚和歌子さんも、詩人として、この取り組みに参加されました。

この<業界>に入って「小学生以下の朗読会では、うんこ、とひとつと言いさえすればつかみはOK」と教えてくださったのは谷川俊太郎さんです。

お教える通りに、まずは拙作詩集「海のような大人になる」から「おしっこ」の朗読を披露するところからレクチャーを開始しました。

こらえきれないといったさざなみのような含み笑いから広がって、おしまいには絶叫ともつかない笑い声が爆発したところで松庵小学校体育館は詩人の思うツボと化しました。

ワークショップ形式で行なった今回のレクチャーは、勢いづいた生徒さんたちが我も我もと挙手をしたり友だちを推挙したりで自作詩発表の渦に。

何でも詩にしていいいんだよ。だって宇宙は今君たちがいる「ここ」なんだから。どこかで聞いた風な決まり文句というやつが、詩にとってのいちばんの敵なんだ。

そんな言葉はしっかりと子どもたちに届いたようで、「うんこ」や「おなら」についての詩も登場し、現場の空気がみちみちと弾けて見えないダンスを踊っているのが手に取るようにわかりました。

実は子どもたち80名の後ろには父兄と地域のみなさんも50人くらい座って

参加をしていらしたのですが、子どもたちのあまりの勢いに押され気味。

お母さん方の発表を煽りはじめたら、子どもたちが後ろを向いて「お母さん、(自作を)読んで読んでっ、お願い」と口々に言うのが何とも素敵な光景でした。

またこの松庵地区は「星の回覧板」という名前の宇宙連詩回覧板をいくつもの地域で回すという試みをしてもらいました。世代を超え、職業性別を越えてつながれ巻かれてゆくいくつもの連詩。

春の完成披露会を待ち遠しく思いながら終了しました。

覚和歌子

第5話

2008年12月4日(水)に、倉敷市立琴浦中学校で、1学年6学級192名を対象にした宇宙連詩レクチャを行いました。また、翌日の12月5日(木)には、倉敷市立下都井東小学校で、4学年1学級22名と、5学年1学級30名を対象にした宇宙連詩レクチャを行いました。今回は、覚和歌子さんのスケジュールの都合から、JAXA宇宙連詩の裁き役の野村喜和夫さんに、レクチャをご担当いただきました。学校学級宇宙連詩のために、谷川俊太郎さんと、覚和歌子さんが作詩いただいた冒頭2詩を出発点に、野村喜和夫さんが、琴浦中学校のための第3詩と、下都井東小学校のための第3詩を、作られました。レクチャでは、JAXA職員が、「宇宙連詩」の「宇宙」の意味を紹介した後、野村喜和夫さんに、詩とは？連詩とは？をテーマに、語っていただきました。そのあと、野村喜和夫さんと生徒で、突撃インタビュー形式で、生徒が自作した詩について、対話を行っていただきました。

宇宙連詩レクチャーの旅

野村喜和夫

倉敷市立琴浦中学校の巻

何であれはじめてのときは不安がつきまとうものですが、今回いちばんそれを感じていたのは、子供たちでも先生方でもなく、ほかならぬ宇宙連詩をレクチャーするこの私ではなかったでしょうか。というのも、ふだん子供たちと接する機会がほとんどなく、学校というところを訪れるのも、自分がそこを卒業して以来じつに四十数年ぶりのことで、いったいどうやって子供たちとコミュニケーションをはかったらいいのか、皆目見当もつかなかったからです。

まず訪れたのは、倉敷市立琴浦中学校でした。瀬戸内海を一望できる丘の上にたつ、それはもう風光明媚な立地です。レクチャーの対象は中学一年生のみなさん。会場の体育館に行くと、ずらっと、私にかかるプレッシャーのかたまりのように、彼ら彼女たちの制服姿がありました。しかし、案ずるより生むがやすし。最初はややかたい調子で、連詩とは何か、どうやって作るか、などとやっていたのですが、いつのまにか、突撃インタビューという形で子供たちのあいだを走り、彼らからできたての作品を奪い取って講評したりしていました。なかなかやるじゃないか。うん、そうだね、それはぼくも同感。えっ、どういうこと？　すごい発想だなあ、プロのぼくでも思いつかないよ。

というようなわけで、こと詩を媒介にするかぎり、子供たちとのコミュニケーションは思いのほか容易であることに気づかされました。けだし、詩を書くとは、おのれの幼年をもう一度見いだすことでしょうかから、かえって子供たちの世界と近いところに身を置くことになるのかもしれない。

しかし、さすがに中学一年生ともなると、大人への準備が言葉遣いのうえにも反映して、作品に複雑微妙なニュアンスが加わるようです。それから、他者を意識し始めます。連詩の要諦は、他者が作った前の詩をどう受けて、そこからどう跳ぶかにあるわけですが、琴浦中学の各クラスの作品には、それがもうきちんとふまえられています。ハイライト部分を紹介しておきましょう。1年4組の作品は、第8詩あたりから言葉について彼らなりに考えるという展開になっていきますが、その第10詩の再終行 「言葉とは自分を味方にするか敵にするかの最強のライバルである」。そうか自分も詩人として「最強のライバル」を相手にしているのだなと、なんだかこちらの身も引き締まるようではありませんか。琴浦中学校のみなさん、ありがとうございました。

下津井小学校の巻

つぎに訪れた下津井小学校は、瀬戸内海に面した入り江の奥の集落にあり、漁にたずさわる家庭も多いとききました。そのためか、子供たちはどこか素朴で、シャイで、それだけに内に何か豊かなものを秘めているのではないかと、それこそ宇宙の秘密にも通じる何かをかくしもっているのではないかと、期待が高まりました。

琴浦中学校の巻にも書きましたが、詩というのは、ある意味で子供時代をふたたびわがものとすることです。まだ自我や社会や何やかやが邪魔してくる前の、世界との生き生きとした交流をもう一度試みようとすることです。ましてや宇宙連詩では、その詩が、宇宙という、人間が想像力をもっとも自由に飛翔させうる場所と結びつくのです。そう、宇宙は何も科学や科学者のためにだけあるわけではありません。

というようなことは、もちろんこの、何かをかくしもった子供たちに話す必要はありませんでした。出来上がった連詩をみてみましょう。4年生のクラスの第10詩 「人間は昔「さる」だった / これって本当のことなのかな？ / もし今自分が「さる」だったら / 何をしているだろう？ / 人間のことをどう思

うだろう？」うーん、大人にはない発想です。そして第15詩。「宇宙で野球が
/できたらいいな/ブラックホールまで飛ばしたい」。この屈託のない壮大なイ
マジネーション！ この三行に出会うだけでも、倉敷まで来た甲斐があったと
いうものです。下津井小学校のみなさん、ありがとうございました。

第6話

2009年1月19日(月)に、福岡県の福岡雙葉小学校で、4学3学級約120名を対象にした宇宙連詩レクチャを行いました。なお、福岡雙葉小学校では、2学年、4学年、5学年、6学年の全学級が宇宙連詩作りに挑戦しました。保護者の方々や、教職員、外部講師の方々も宇宙連詩作りに参加されました。学校学級宇宙連詩のために、谷川俊太郎さんと、覚和歌子さんが作詩いただいた冒頭2詩を出発点に、4学年3学級の担任の先生方が、それぞれ第3詩を作りました。児童が、第3詩を作り、レクチャに参加しました。レクチャでは、JAXA職員が、12月に実施した宇宙レクチャを、おさらいをする形で、「宇宙連詩」の「宇宙」の意味を紹介したのち、覚和歌子さんに、詩とは？連詩とは？をテーマに、語っていただきました。そのあと、覚和歌子さんと生徒で、突撃インタビュー形式で、生徒が自作した詩について、対話を行っていただきました。

福岡雙葉小学校は、活発な四年生の女子生徒たちが積極的に手を挙げて自作詩を朗読してくれる賑やかなワークショップとなりました。

初めて、女子ばかりのしかもカトリックの小学校に何うということであるいろいろな興味を持って臨みました。

レクチャーのはじめに、詩集「海のような大人になる」から「かみさま」という詩を読もうというのは最初から決めていました。

「かみさま

かみさま とよびかけて
はーい とへんじされたら
なんだか こまる

かみさま とよんだあと
しばらくの しずけさに
かみさまは いる」

「私は何かの宗教を信じているわけじゃないんだけど、神様っていると思ってるの。

みんなは神様のことを思ったりすることがある？」という問いかけに、あまりにもあたりまえにうなづいて「うん。毎日思ってる。」と答える子どもたち。

人間が作り出した「神」という概念は、あまりにも理解不可能な宇宙のしくみ、ことわりを擬人化したものだと思いますが、そんな「神」の気配を日常的に感覚している子どもたちがほかでもない宇宙連詩に取り組んでいるということが、私には面白くてなりません。

子どもたちはきっと、まずは大気圏外のことだけを宇宙と定義し、神様は生きていく心の拠り所として、それぞれとらえているのだと思います。

「神」も「宇宙」も、実はこの日々の暮らしと隣り合い、寄り添ってあるものなのだという実感を子どもたちと詩作の現場で共有できたらどんなに楽しいでしょう。

詩を作る作業は、日常の中に非日常を発見しそれを見つめていくことです。いずれまだまだ続いていく宇宙連詩の詩作現場のひとつに、そんな奇跡的瞬間を期待しつつ福岡を後にしました。

覚和歌子